

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531165

研究課題名(和文) 単元構成における「題材」概念の成立と変容過程の研究

研究課題名(英文) Researching a Process to Form and Develop a Concept for Subject Matter Used to Create Teaching Units

研究代表者

山田 一美 (YAMADA, Kazumi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：80210441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「題材」概念の教育用語への受容と成立、変容を確かめ、現代的意義を探ることである。1950年代後半、美術教育では絵画、彫刻、デザイン、工作・工芸、鑑賞による教科内容が確立し、領域中心の題材構成が主流となる。1970年代、題材概念は合科・総合教育、造形遊び等の問題を契機に変化する。1982年、美術指導資料において、題材は「教師と生徒をつなぐ媒体」と定義される。同時に、題材概念は、現代アート、経験主義の思想、プロジェクト、ESD等の方法の影響を受け変容する。結果、題材は、可視的対象物としての意味を越え、子ども・教師・環境の相互作用から生成される「経験」を包む総体として機能している。

研究成果の概要(英文)：This study surveys the reception, establishment, and changes of educational terms concerning the concept of subject matter and explores the significance of this process for today. In the 1950s, the five fields were established as constituting art education. Mainstream art education focused on disciplines. In the 1970s, the concept of the subject matter underwent transformation under ideas such as integrated curriculum and formative play. In 1982, the subject matter was defined in a book of art instruction material as "media that connect teachers and students." At the same time, the concept of the subject matter of art is changing under influences such as modern art, empiricism, project-based learning, and ESD. As a result, a subject matter as art education has transcended the meaning of focusing on visual objects, and is functioning, as a holistic subject matter comprised of "experiences" produced from the interactions between students, teachers, and the environment.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：題材 中心概念 図画工作科・美術科 単元構成 教材 主題

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する先行研究の文献資料は、美術教育雑誌及び関連学会誌の2つの領域にある。美術教育雑誌『美育文化』には「題材」論争が掲載されている。その特質は、当時まだ「題材」概念が共通概念としてオーソライズされておらず、それぞれの論点に違いが見られることである。事例として、村内哲二「題材と教材」1978,28(6) / 藤沢典明「題材を生かす」1978,28(6) / 久里英人「子どもの描く題材」1976,26(10) / 滝本正男「子どもがかきたい内容」1976,26(10)などにみる主張の違いである。次に、美術教育関連学会誌に掲載の2000年以降の論文(Aは「大学美術教育学会誌」を、Bは「美術科教育学会誌」を指す。)によると、継続的な研究成果は蝦名敦子と立原慶一によるものがある。両者の成果から、個々の「題材」観を整理することが可能であるが、この概念の「成立過程」は考察されていない。

(2) その他、「題材(教材)」に関わる研究は継続的に生産されるが、題材の成立・変容過程に踏み込む論点と構想は見られない。例えば、神谷「技能の習得及び題材(テーマ)」B(2009)、渡部「鑑賞教材『Visual Thinking Strategies』」A(2009)、高橋「造形教材開発論」A(2008)、永本「国民学校の教材観」A(2008)、高木「視知覚題材」B(2007)、隅「教科書題材目標文の解体」A(2007)及び「題材開発」B(2007)、増田「明治後期図画指導法」B(2006)等、個別の研究成果の高いものはあるが、個々の事例分析に焦点化されている。国外の美術教育関係では、「題材論」に当たる議論が見当たらない。現在、Visual Culture論、物語論、Graphic Novels論(Art Education, NAEA, 2008)や、多様なメディア論に関心が集まっている。

以上の背景から、題材概念がどのような事情で、どのように整理・概念化されてきたかを問うことが必要となっている。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、「題材」概念の受容と成立、変容の過程を検証し、「題材」概念の現代的課題を整理することである。第二次世界大戦までは、単元構成には「業・図」「教材」「題目」等が混在した。戦後、教材(経験)単元の導入後、「題材」主義に向かう。「中学校美術指導資料」(文部省、1987)によって「題材」概念が提示され、以後指導計画・授業づくりの中心概念となる。その一方で、大阪万国博覧会(1970)後、題材内容にイベント・祭典の要素が組み込まれ、「プロジェクト」等の授業展開とともに、「題材」概念が変容しつつある。

(2) これらを総合すると、学校教育における図画工作科・美術科で使用されてきた「題材」概念は、一般美術界において使用されてきた用語や教育界で使用されてきた教材等の意味から援用され、教科独自の用語として概念が成立してきたと考えられる。しかし、その後も教育環境が大きく変化するなかで、「題材」概念は変容してきていると仮説立てられる。本研究は、その成立過程を解明し、教科内容的な視点から課題点を整理することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 平成23年度は、戦後の文部省刊行の『指導要領』『解説書』『指導資料』を素材として、「題材」概念がどのように登場し、1982年の「中学校美術指導資料」の「題材」概念の提示に至る過程を描く。第二に、戦後刊行の雑誌『美育文化』『教育美術』を素材として、「題材論」を整理し、「題材」概念の成立過程の裏付けをとる。特に、教科内容領域の柱である絵画・彫刻・デザイン・工芸・鑑賞において、「題材」がどのような概念と構造をもつのかを検討し、その違いと共通項を整理する。

(2) 平成24年度は、『美育文化』『教育美術』等の教育雑誌、及び図画工作・美術教科書、

関連指導書に使用される「題材」概念を継続的に整理していく。また同時に、学校美術を取り巻く一般美術において使用されている「題材」の概念を整理し、教育用語としての「題材」概念にどのように影響を与えているかを検討する。後者の検討対象として、大規模な美術館展の図録解説等に使用される「題材」概念を整理する。

(3)平成25年度は、前年度の研究成果を踏まえ、一般美術及び近代美術史の観点から得られた知見と、デューイら経験主義的な教材組織論を整理し、「題材」概念の今日的意義と課題を検討する。

4. 研究成果

(1) 前述の本研究の仮説を裏付ける平成23年度の研究成果は以下のとおりである。昭和30年代の「題材」概念は、多様というよりは曖昧であった。特に、デザイン領域では「教材・題材・主題・題・題目」であるもの、等の用語と区別がなかった。ところが、中学校美術指導資料「美術科における指導計画の作成」(1982)では、題材概念は変化する。そこでは「題材」の概念は、美術科の学習活動の実際に目を向け「教師と生徒をつなぐ媒体」として提示される。具体的な内容領域について、「絵画」と「彫塑」は、「観察」と「想像」をもとにし、美的直観力と想像、造形思考法を展開する「題材」の枠組みを提示した。他方、「構成と伝達のためのデザイン」と「工芸の製作」は、これとは違う複雑な題材の枠組みを示している。また、デザインでは、絵画や彫塑の指導にみられた「題材の大別」が見られない。その結果、1980年代までの題材概念は領域中心から構想されたものであり、教科性の共通項としての自覚や意識が芽生え総体的な題材概念を初めて提示しつつも、なおも内容領域独自の枠組みと構成原理に支配されていたことがわかる。

(2)平成23年度の研究成果によれば、昭和30年代の「題材」概念は曖昧であったが、そ

の後、中学校美術指導資料「美術科における指導計画の作成」(1982)において、「題材」の概念は、美術科の学習活動の実際に目を向け「教師と生徒をつなぐ媒体」として提示された。一方、一般美術にかかわる「題材」概念を同時に整理することは避けられないものとなった。そこで、今日の大きな美術展の図録解説を見ると、「題材」概念は、「主題」と密接に絡み合い、題材と主題の関係を踏まえ、学校美術教育の題材概念を描く手順が必要であると判断した。平成24年度後半は、美術館展の図録から、題材と主題の関係を整理した。対象として、古典美術を含む充実した美術館展、すなわち大英博物館展、ベルリン美術館展、マウリッツハイム美術館展の図録に掲載の論文と作品解説を検討した。その結果、フロマンタンやレイノルズが洞察したように、「主題」から「題材」へという転換が図られていた。つまり、物語的なエピソードをもつ歴史・宗教・神話の一場面を表現してきた絵画から、それを必要としない絵画が誕生した後、「主題」では語られず、事物の対象としての「題材」によって語らざるを得なかったとみる。「読む」絵画から「見る」絵画への転換がここにあった。これらの論点を踏まえると、日本において静物画、風景画を中心とするかつての学校美術教育が、「主題」で語らず「題材」という概念によって、「表現する内容」を押さえようとする背景が見えてきた。

(3)美術アカデミーの歴史画・神話画において、古典的物語の場面との関係で「主題」は必要不可欠であった。例えば、フランスの絵画・彫刻王立アカデミーは、当初「裸体」を授業の中核的題材とし、「歴史(物語)画」が頂点を極めた。しかし、当アカデミーが「歴史(物語)画」を中心的地位に置きながらも、「風景画」「静物画」に加え「風俗画」などの「新ジャンル」を容認していく。かくして、17世紀オランダ絵画に特徴的な風景画・風俗

画において物語主題は欠落していく。典拠・原典がある「読む」絵画から、造形上の感性を重視する「見る」絵画へ転換したといえる。やがて、美術の動向は19・20世紀において「イズム」を中心とする運動に支配される。「抽象絵画」「前衛」が登場するに及んで、「ジャンル」「主題」は大きく変容する。ここには対立軸や主義主張、創造性が高く掲げられ、様々な芸術的実験を通して領域・分野のジャンルと表現素材は拡張していった。その結果、前衛派は「フォーヴィズム」「キュビズム」「シュルレアリスム」「抽象」「ポップ」「ミニマリズム」など、多様な主義・主張・方法へと広がった。

この間、19世紀末に、フランツ・チゼックは、美術教育を通して、子どもがもつ能力の存在を世界に訴えた。彼は、ウィーン的美術アカデミーで絵画一般と歴史画を学んでいる間、子どもの自由な表現(落書き)に個性と創造性があり価値があることに気づき、美術アカデミー近くに、子どものための私設の美術教室を開設する。彼は、1900年直前に始まった「(芸術)教育改革運動」を通して、「子どもの個性と自主性を十分に理解し、その基盤にたって授業」を進めていった。彼の教育メソッドは、子どもの内面にある自由への欲求と彼らの表現意志を促進・助長することを特徴とした。それまで、学校生徒は、お手本を「模倣」するように、あるいは提示された様式を装飾し彩色することを強制されていた。普通教育学校における図画の授業は、ある特定の技巧を鍛錬するだけのものとなっていた。これら改革運動は、「模倣からの解放」を意味している。つまり、彼は「モデルなしに描く」美術教育を実践したことになる。「モデルなしに描く」ことは、それまでの美術教育にとって革命的なことである。チゼックの授業では「子どもが勝手に描く主題」を採用している。チゼックの自由な造形教育は、幅広くしかも子どもたちの興味や意欲を巧

みに生かして、一人一人の個性を創造に移行させていくものであった。見ないで描くことは、過去の体験や記憶のなかに「題材」を探し、気に入ったものを選び出して描く方法に発展していく。

(4)さて、日本では、「70年大阪万博」の年代から現代アートの時代状況は変化する。運動は分裂と細分化を繰り返し、「イズムの終焉」「大きな物語の消失」と叫ばれ、歴史的枠組の意味を失い、現代美術家は標識・道標なき原野に放たれたごとく、「自己の感性」だけを導き手として、独自の世界観・新しいジャンルの創造に向き合った。

アカデミックな美術から現代アートに展開するなかで、とくに「具体」は、「これまでになかったものを創れ」、「抽象的な表現であること」を前提とし、それまでの美術ジャンル・主題を排除し1970年大阪万博に臨んでいる。こうした動向は、欧米や日本のアート・シーンで流行した「脱ジャンルの」「インタラティヴな」、いわゆる「環境芸術」運動に呼応した現代アートとして評価されている。

花篤實は、当時の新領域の「デザイン教育」について、1950年代後半以降、アメリカの生活美術教育、バウハウスの基礎教育、単化・硬化などの図案教育、モダンアート、抽象画、などを取り入れながら実践してきたことを記述している。大阪では学生時代に「環境美術」や「現代美術」の洗礼を受けた「若い美術教師」が、「行為の美術教育」として総合的な造形活動を展開し、従来の絵画・デザインという「既成の領域分け」(ジャンルの)意識に囚われずに「題材」研究をし、実践を積み上げていった。「題材」は造形対象・技法の範囲を超え、一連の行為やプロセスを含み入れるものとなった。この動向は次のことと結びつく。

1950年代後半、教科確立のための「美術教育の現代化」に合わせて、図画工作・美術

科の教科内容ジャンル「絵画」「彫刻」「デザイン」「工芸」「鑑賞」が成立すること。

1960年代、要素・分析的な新ジャンル「デザイン」に対して主題・題材のあり方が問題化すること。

1970年代、学習指導要領改訂にあたり、教科内容の精選とゆとりを基本テーマとし、「合科教育」や「総合教育」の問題が提出されたこと。

上記の境目に、1970年大阪万博が位置し、そこを運動の頂点とする前衛美術・抽象表現の発表がなされ、教科ジャンル・主題・題材の劇的な変化・変容をもたらした。

結果として、「題材」概念は、古典物語主題から、造形上の視覚題材・材料へ、さらにはプロジェクトやワークショップ、ESD等に見られる「かかわり・つながり」のための契機として意味を変えてきた。その主な要因は、題材の意味や題材への関心が、デューイの示唆する「経験の再構成」や「相互作用論」に見られるように、単元構成や授業活動において「教材(題材)としての経験」の知的・道徳的な組織化のあり方に方向づけられたことに関係する。そのため、「題材」概念は、可視の対象や静止した対象を越え、子ども・教師の関係を含めた「経験」から生成される意味や原理を包含する結果となっている。

(5)本研究は「題材」概念の教育用語への受容と成立、変容を確かめ、現代的意義を探ることである。1950年代後半、美術教育では絵画、彫刻、デザイン、工作・工芸、鑑賞による教科内容が確立し、領域中心の題材構成が主流となる。1970年代、題材概念は合科・総合教育、造形遊び等の問題を契機に変化する。1982年、美術指導資料において、題材は「教師と生徒をつなぐ媒体」と定義される。同時に、題材概念は、現代アート、経験主義の思想、プロジェクト、ESD等の方法の影響を受け変容する。その結果、題材は、

可視の対象物としての意味を越え、子ども・教師・環境の相互作用から生成される「経験」を包む総体として機能している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

山田一美、中学校美術科における「題材」概念の成立-中学校美術科指導資料「美術科における指導計画の作成」(1982)を中心に、美術教育学、美術教育学会誌第33号、査読有、2012年、432-436

http://ci.nii.ac.jp/els/110009437634.pdf?id=ART0009915005&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1401859896&cp=

山田一美、美術指導資料「工芸の指導」(1974)における題材概念、大学美術教育学会誌44号、査読有、2012年、447-454

山田一美、題材とは何か-『美育文化』から探る1970年代後期の実践理論-、大学美術教育学会誌、査読有、No.43、2011、367-374

〔学会発表〕(計4件)

山田一美、単元構成における「題材」概念の成立と変容過程の研究(2)、第36回美術科教育学会奈良大会、奈良教育大学(日本・奈良市)、2014年3月28日

山田一美、美術館展解説図録にみる主題・題材概念-大英博物館展、ベルリン美術館展、マウリッツハイス美術館展図録から-、第35回美術科教育学会島根大会、島根大学教育学部(日本・松江市)、2013年3月28日

山田一美、「デザイン学習」関連文部省刊行物における題材概念の位置づけ、第34回美術科教育学会新潟大会、新潟大学教育学部(日本・新潟市)、2012年3月28日

山田一美、文部省発行図画工作・美術関連の「指導資料」にみる題材概念、第50回大学美術教育学会宮城大会、宮城教育大学(日本・仙台市)、2011年9月25日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 一美 (YAMADA, Kazumi)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：80210441